様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 21 日現在

機関番号：３２６５２
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：２００８－２０１１
課題番号：２０３３０１３９
研究課題名（和文）　複雑系システムとしての感情制御
−幼児期における生理・行動・文化レベルからの検討−
研究課題名（英文）　Emotion regulation as complex system: Behavioral, physiological and cultural analysis in early childhood
研究代表者
平林　秀美（HIRABAYASHI HIDEMI）
東京女子大学・現代教養学部・准教授
研究者番号：９０２６１７１８

研究分野：発達心理学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：感情制御、子ども、文化、生理的反応、実行機能、心の理論、養育態度、気質

１．研究計画の概要

本研究の目的は、幼児期の感情制御システムの発達過程を明らかにすることである。日米の就学前期の幼児を対象として、感情制御システムにおける３つのレベルに着目し、同一実験参加者への反復測定データの収集・分析により、その生起要因と発達過程を検討し、感情制御能力の養成につながる知見を得ることを目指すものである。感情制御システムの３つのレベルとは、生理的反応レベル（唾液に含まれるコーティゾールの分泌量）、行動レベル（フラストレーション場面の感情表出および抑制と対処行動、対人的相互交渉場面での行動）、媒介要因（子どもの認知能力、子どもの気質、親の養育態度、親の気質、文化）である。感情制御を３つのレベルと比較文化的・縦断的研究から検討し、複雑系システムを明らかにすることを目的とする。

２．研究の進捗状況

４歳児の感情制御システム課題の本実験を実施した。同じ対象児に３日間連続で実験に参加していただいた。

(1) 生理的反応の測定：唾液中のコーティゾールの測定をおこなった。幼児の日常のコーティゾール反応をみるために、起床時と就寝時の家庭での唾液を採取するとともに、大学のプレイルームで実施した感情制御システム課題の実施前（30 分前）・実施直前（0 分）・実施後（10 分後・20 分後・30 分後・40 分後・50 分後・60 分後・75 分後・90 分後）の 10 回×３日間唾液を採取した。現在分析中であるが、コーティゾール反応には個人差があり、感情制御の生理的反応にはいくつかのパターンが見込まれる。

(2)行動の測定：３つの感情制御システム課題（封筒課題・プレゼント課題・コンピューターゲーム課題）を実施して、幼児が感情制御をおこなっているかどうかについて表情と言葉の分析を行った。プレゼント課題の際に、日本の幼児はアメリカの幼児に比べてネガティブな言葉を話すことが少なかった。表情を表す際も、泣きや怒りよりも困惑やニュートラルな表情を示すことが多かった。

(3)媒介要因の測定：幼児を対象に、実行機能課題・心の理論課題・デンハムの感情理解課題・積木模様課題・言語課題を実施した。日米の比較を行ったところ、心の理論課題のうち複数の課題についてアメリカの得点のほうが高く、デンハム感情理解課題の表情図のラベル付もアメリカの得点のほうが高かった。

(4) 媒介要因の測定：養育者を対象に質問紙を実施し、親の養育態度・親の気分の質・子ども気分の質・日常の子どもの行動傾向を調査した。事前に幼児をもつ親を対象として聞き取り調査を行った結果、日本の親が幼児のネガティブ行動にすぐには介入せずに見守る傾向があることが明らかになり、新たな項目を作成して養育態度尺度を改善した。

３．現在までの達成度

③やや遅れている

［理由］

実験を開始する前に、アメリカ側との綿密な打ち合わせを重ねる必要があり、そして実験者と唾液採取者のトレーニングが不可欠であったためにデータの収集開始時期が予定よりも遅れた。しかし、日米で文化比較が可能でミスのないデータ収集のためには必要だったと思われる。また、唾液の分泌量には個人差および季節差があり、夏に実施した

実験で採取した唾液量が不十分でコーティゾールの分泌量の分析ができないと思われるケース及び極端に唾液量が少ない幼児がいた。そのため、当初の予定よりも多くの研究参加者を募集して、目標のデータ数を収集することができたが、データ収集に予定よりも時間がかかった。

４．今後の研究の推進方策

今後は、生理的反応（コーティゾールの分泌量）の分析を進めるとともに行動レベルおよび媒介要因の分析を進め、その研究成果を国際感情心理学会および論文として発表予定である。また、５・６歳児向けの感情制御課題及び認知能力課題についても検討をおこない、縦断研究のための準備を行う予定である。

なお、生理的反応（コーティゾールの分泌量）の分析料金に、研究計画時に見込んでいたよりも多くの経費がかかることがわかったために、縦断研究（５・６歳時の感情制御課題及び認知能力課題の測定）の実施費用が不足する見込みである。研究の継続のためには、新たに研究費を獲得する必要があり、今年度に申請を行う予定である。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

(1) 唐澤真弓，通説を超えて−比較文化的再考（書評シンポジウム：高野陽太郎（著）『「集団主義」という錯覚−日本人論の思い違いとその由来』(2008 年・新曜社)），児童心理学の進歩，第 49 巻，pp.220-224，2010 年，査読無.

(2) Kitayama, S., Park, H., Sevincer, A. T., Karasawa, M., & Uskul, A. K. A cultural task analysis of implicit independence: Comparing North America, Western Europe, and East Asia, Journal of Personality and Social Psychology, 第 97 巻, pp. 236-255, 2009 年，査読有.

(3) 平林秀美，人間関係づくりのための子どもの「うそ」，児童心理，第 63 巻，pp.1056-1061，2009 年，査読無.

〔学会発表〕（計 17 件）

(1) 平林秀美，情動制御の個人差とその関連要因，日本発達心理学会第 22 回大会 大会委員会企画シンポジウム「情動制御の発達―関係性，自己の視座から―」話題提供，2011 年 3 月 27 日，東京学芸大学.

(2) 平林秀美・風間みどり・Twila Tardif・唐澤真弓，４歳児の感情制御の発達　−プレゼント課題の分析から−，日本心理学会第 74 回大会，2010 年 9 月 21 日，大阪大学.

(3) 風間みどり・平林秀美・Twila Tardif・唐澤真弓，日本の母親の養育態度の文化的意味 −SOMA による検討−，日本教育心理学会第 52 回総会，2010 年 8 月 27 日，早稲田大学.

(4) Karasawa, M., Hirabayashi, H., & Tardif, T., When sympathy and empathy are fused: Japanese preschoolers' understanding of others' emotions, 2009 the Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, 2009 年 4 月 4 日, Denver: USA.

(5) 平林秀美，心の理論の発達と関連要因−日本とアメリカの比較データより−，日本教育心理学会第 50 回総会 自主シンポジウム「文化と心の理論-比較文化研究データからみた日本の子どもの他者理解−」話題提供，2008 年 10 月 13 日，東京学芸大学.

(6) Karasawa, M., Socio-cultural Aspects of Emotion Regulation (Invited Symposia: Chair.), 20th Biennial International Society for the Study of Behavioral Development Meeting, 2008 年 7 月 17 日, Wurzburg: Germany.

(7) Hirabayashi, H., Kazama, M., Ohno, S., Tardif, T., & Karasawa, M., Emotion regulation in preschoolers: Links with temperament and executive function, 20th Biennial International Society for the Study of Behavioral Development Meeting, 2008 年 7 月 16 日, Wurzburg: Germany.

〔図書〕（計８件）

(1) 平林秀美，川島書店，社会化の心理学／ハンドブック（菊池章夫・二宮克美・堀毛一也・斎藤耕二 編著），2010 年，pp.353-366（子どもの感情制御）.

(2) 平林秀美，朝倉書店，感情と思考の科学事典（海保博之・松原望 監修，竹村和久・北村英哉・住吉チカ 編集），2010 年，pp.16-17（1-2-2 感情の社会化），pp.42-43（11-4-4 他者の感情への感受性）.

(3) Tobin, J., Hsueh, Y., & Karasawa, M., The University of Chicago Press, Preschool in three cultures revisited: China, Japan, and the United States, 2009 年，265 頁.

(4) 平林秀美，北大路書房，乳幼児心理学 −新・保育ライブラリ 子どもを知る−（無藤隆・岩立京子 編著），2009 年，pp.47-58（他者の心を知る）.

(5) 唐澤真弓，丸善，社会心理学事典（日本社会心理学会 編集），2009 年，pp.71-72.（社会化《文化》）.

(6) 唐澤真弓，新曜社，キーワードコレクション 心理学フロンティア（子安増生・二宮克美 監修），2008 年，pp.118-125.（文化心理学・相互協調的自己観）.